

晩秋おだやかな11月2日、当別町立川下小学校の100年閉校記念式典が行われました。同校は、来年3月31日閉校を迎え、100年の歴史に幕を閉じます。

## 学校の変遷

川下地区が開墾されたのは、1887年（明治20年）頃のことでした。1903年（明治36年）、いまだ未開地が多く巨木がうつそうと生い茂り、当時の当別小学校へ児童が通うことは困難だったことから、地域の先人たちが校舎の建築に着手し、翌年、当別尋常高等小学校川下出張所として開校しました。

明治、大正、昭和、平成と流れる中で、校名の変更、校舎の改築、移転など時代の流れとともに変遷を繰り返しながらも、学校は教育の場のみではなく、川下地域の中心としてその役割を担ってきました。1947年（昭和22年）には、107名の児童が在籍し、1960年後半（昭和40年代）からは、優れた穀倉地帯として高度経済成長を背景に発展してきました。しかし、近年の少子高齢化、社会情勢の変化などで児童数は激減し、2002年（平成14年）度から新入学児童がいなく、今年度は3年生から6年生までの在校生9名と教職員5名で学校生活を送っています。

この1世紀に川下小学校の卒業生は973名を数え、開拓当時から川下地区で家業に従事する方、町内外、各界で活躍する方などさまざまではありますが、小学校の閉校に寄せる思いは皆さん同じではないでしょうか。

## 閉校記念行事

平成10年に「川下小学校と地域を語る会」が結成され、これからの学校について幾度とない話し合いを重ね、結果的に「閉校」という結論を出した同地区は、記念事業協賛会を中心に記念誌、式典、石碑の建立など閉校を迎える準備を進めました。また、子ども達もたくさん思い出づくりや、川下地区の調査など多くの取り組みを始めました。迎えた11月2日、さわやかな秋空に美しく映える川下小学校の木造校舎で「閉校記念式典」が執り行われました。

いつも開散としていた体育館には、同窓生や歴代校長・教諭、地域の方々が280名も集まり、100年を振り返り、お祝いし、また閉校

ありがとう！  
100年の思い出 川下小学校  
～地域活性化の拠点として新たな歩みを～



を惜しむ会でもありました。しかし、9名の在校生が行った児童発表「思い出とともに」は、地域に生きる子ども達の限らない可能性を感じさせる素晴らしい発表でした。

グループに分かれて昔の生活、昔の学校との違いを調査に歩いた「川下調査隊」、自然豊かなこの地区で、普段の生活では見つけられない新たな発見や体験をした「川下探検隊」。どちらも地域のひと多くを語り教えてもらい、見て聞いて感じたことをスライドと寸劇、作文で披露しました。児童一人ひとりが元気に明るく、この地域で見守られながら成長している様子が伺われます。

また、校舎の片隅に校歌と「心育む川下の大地」と刻まれた記念碑が披露されました。雄大な川下の自然と共に育ち、巣立っていく子ども達。思い出とともにあるこの大地は、変わらずにあり続けたいとの願いが込められています。自分達の母校を忘れることなく、未来への強い希望を託して9名の子も達が作詞、山元恵教諭が曲をつけた「思い出とともに」の澄んだ歌声が校舎に響き渡りました。「輝く未来 歩いていこう 夢の扉 自分で開け・・・」と。

### 新たな出発をめざして

今、学校教育の使命を終えようと

している川下小学校。しかしながら、これからの活用しだいで地域を盛り上げ、町づくりの一翼を担う新たな施設として生まれ変わる可能性を十分に秘めていると言えます。

今年8月には同校で映画「雨鱒の川」のロケ撮影が行われました。昭和のどかな田舎を沸々と思いつくさせる優雅な景色と校舎は最高のロケーション場所として高く評価されました。景観豊かな古い木造校舎を映画、テレビの撮影などに使ってもらい、本町を全国にPRすることで多くの人に知ってもらうことができます。都会の人々が心と癒せる癒しの場所として古い施設を有効に活用し、町の活性化の一役を担っていくことが考えられます。現在、町は住民と行政が足並みを揃え「美しいまちづくり」に取り組んでいます。

都会から訪れる人は、当別町に何を求めて足を運ぶかを考えたとき、都会にはない閑静な自然景観と、豊富で安心できる農産品や特産物などであり、私達はそれに応えるため、美しい町と美しい心でもてなすことが、都市と農業の町を共存共栄していく道にもつながっていきます。

この学校の閉校を歴史の一コマに終らせないために、行政主導ではなく、地域住民や町民自らが考え行動するという新たな住民活動が、これからの出発の第一歩となるのではないのでしょうか。

未来の川下を見守る石碑



映画「雨鱒の川」の撮影



式典参列者に感動を与えた児童発表

